を大宰春臺に受け結く経史に通じ詩賦を天門上人に
学びて頗る體に熟せり廣陵にて測量に精しく西
人の器を一変して玄象儀といふものを造れり思恭もまた
深ひて測量の法を学びその器によりて測り試るに毫
毫分寸を失はざりまた射術を能するをもて二十七
歳にして土浦侯に仕へ禄を受けて廣陵没せしに
ず思恭の名まことに海内に震ふ筆力の精妙なるあさも
驟雨の如くにして門弟凡そ五千人大小社諸侯すべて数
十ありて学ぶもの虚日なし東叡大王思恭を召
して楊州帝に上るこころの詩をしきりに代り書しめられし
うばおもひきるに天稟をもつてうつくしく大王帝より額

倩の筆法を受けふといでをたまはりその倩に学ばれもつて
あまねく思恭に暮れ仰ぎとあまねく時思恭詳に辯じ倩
はしらばかりとよろこびもひとしく失ひしを今悉く
得ることのあたはず思恭額倩を受けざれども筆法を編ず
るにいたりて八特究するとかくの如く晩年名声尤も高く唐山の
人遥に思恭が墨妙を倩人少て可真州真あどいふ人詩
を考て稱誉せり法帖は世に行はるるもの唐詩五律三體
銀燭帖行書千字文唐詩七絶ホ数種あり年六十五
歳癖を患ひ歩履自由あるべといども運筆の縱横その
勢の強なる舊観を改ずと云り明和乙酉十二月廿九日年
六十九にして没す江戸小石川稱名寺に葬る

美成ニ思恭の男を其寧といふ箕裏をつぎく弘く世に知られ門人とよ多くその子克明克明の子思亮いづれも名声世に言く空しくう思亮ハ壮年ふしく没すといでも著作のこるべき歟又学ありくハ毒をよくく乃好古癖あり古々の法書に拓くの墨写数秒名山諸家の極といで也あまね多く網羅せんといふと雖も父克明乃て行書類纂の編次あり思亮勉強怠ることず力たりといへども思亮年と同庚とよ奚逆乃友こう今已に亡くたるその書を見ることあまぜ懐旧の情よたへ難をうるわせり

松山天姥

松山天姥名ハ敬和字ハ伯義天姥ハ別号なり生れく幼秀髪眉くく安志侯に仕へこう侯弱くく時より学士に礼式あくく頗優雅を尚びその書法もまた勤めく書附小傑出せりくれハ勝ハ謹厳子粛をとく友くく慕ひ人足されバくねく天姥の書才あるを愛しまひくある時天姥よのなかやう子ハ書法を誨ゑくく自勤め学べよとありくれバこれより天姥孜々くく業を進て世よもやうく有くるべくあくく壮年よて父を喪ひ母の養ひに生育せり母ある日くくハくより天姥が怠りがちに見くたりくるバ一古簀を提け来りこれを須るに及古雅をあせりこれを天姥

幼より習ひ書くるところの字紙あり その紙色はことごとく色
年月を考へ指を屈してその時をそぐへ云ふ汝幾
歳のとき書くるものの印くれ如く幾歳あるかを考へ
くれば吾程よりことごとく他日の公達子肅が筆は後ることを
ときやんと思ひたくしが始めの勉強は比さハ大は進
ざるより似うむじめより吾驚馬の鞭くれて駕まやうくは
歩を進ずるが如きを形さんや汝おんぞ勉めざるやとてうの字
紙を抱きくさめくと泣くるがごとく天姥もこれよりいよ
力て怠ることなく寝食を忘るるまで心用を古法帖よき
しば終よも書を求むるものの多くしとぞくて勤仕ふ
ひとまかくしてども猶怠あるとかくそれ業とする

ところはすかたち古人よりもすぐれ云ふべくされば世は
その名を考へざるものかくされども天姥曾て云ふ
ふ小國は未だ考へ大方考へは鄙斥せられずくく詩
書の席はつくるかもるハ実はうるぶと老母との教誨のあつき
よりとくそうくその人とあり謙孫辞讓ふくく人を
侮ずたまく人の一善行あるを聞くば朝夕これを称くく
やまずこれ一事をもくもその恒を押ひやるべくく天明癸卯
十一月年五十八歳ふくく没す駙の形行寺は葬る
美成云古来賢達の人あるひはその母は賢よりあり
孟母八云もさくあり晋は陶侃宋の伊川こうこうあり
父ハ厳ふくく親あるとも母の慈愛よりおくくこと

母の愛あるふるその養育の際くれぐれ教誨おきことあさからず習ひ性と成るといふべしを来皆川淀園母の病林は看護仕養せし時その母ゴ病ハ憂ゴ
ゴ唯世ゴくハ汝が業は婚げあん汝勤学也
よ我をして念とするとあれとうとう墓義の文は
尺ゴう書面ハ少尺ゴもその母は教へさげまゴ
ゴゴは天姥の書名世はあまねく世ゆるいれり
といふべし

水禽ト也

水禽ト也名ハ元成初のあれ人とゴとを考ゴその父を
川崎氏水とゴふたゴめ小條氏世は仕へ後は大坂の城中は

あるゴ落城のゴうは戦死せり卜也父はおゴれ世乃治平
は至りて江戸小来り諸礼を高義ニ命ゴ久也は学び
後小上京ハ左ゴうは就ゴくその宗ゴ考ゴう業熟しゴく名声
世はあまねく門人いと多ゴう老年はいうて狂矍孫小し
て教ゴくゴ伝ゴ公子貴族は迎へ学ぶその多少ゴバ自ゴ
ゴゴは遑あゴず門弟子をしゴく代り教へしむト也ゴゴ
摩訶衍法華経ゴ文けゴく常は経文を読誦し暇あれバ
碁ゴ囲ゴ又ハ閑話は日を消しゴく楽しゴとせしゴあり年
九十耳目あゴ聰明ゴゴゴ也ゴゴ元禄十年八月十四日
卒す

中沢氏二

中條殿二名ハ義道通称ハ彦屋久兵衛と云り京師上京新
町一條通りに住ゝ父と共に織職をなりて生計とせり
その家日蓮宗にて雙親の宗門の教を信ずるといとあつ
く朝暮唱ふる妙法とは如何と問ふに玄義を考へ合て何と
なく心よりてあるゝしが後に大修行を積む基なりけ
る事は鬼子母神を信じ奉り参詣せしまある時ゆへ
なく此尊像ハ本にて彫しまや親にて彼たるゝしは
やはりねどもなく形容の霊応あるやいなるを名よりあるを
不審しまてあるゝしがまさ世間の形容は験あ
とのゝぎるハとゞかなまり他に求めんとなる世の
ゝ疑念つねに絶ずまさ法華経ハ諸経最第一なる四

十條年未顕表実とも説くもゆひく法華経より尊ゝもの
又あるまじ已に観世音の三十三身ハ変像をこの妙法乃
徳なりと称するものゆふものもやはりく日夜朝暮ハ工夫怠
ずと云ども家業ハ世中多くて読書の隙なきバせめて
ハをりまれく講釈法話を少られるとさくある時日蓮
宗の書院に詣でゝものあるゝに堂前にある妙法の二字を
書る扁を見くに傍なる僧に問ひるハ妙法の二字ハその義い
かといとゝふの僧一天四海皆帰妙法なりとこゝゝが是
なれども疑ひあきまあるねバこの僧名ある僧に者ゞ問ひ試
せと云ども生徒の中ゝ暴れて益れゝたゞ信じく唱へられ
まとぎりまて前ゝ義ある僧とゝもあるゝ人れバ空ゝく色

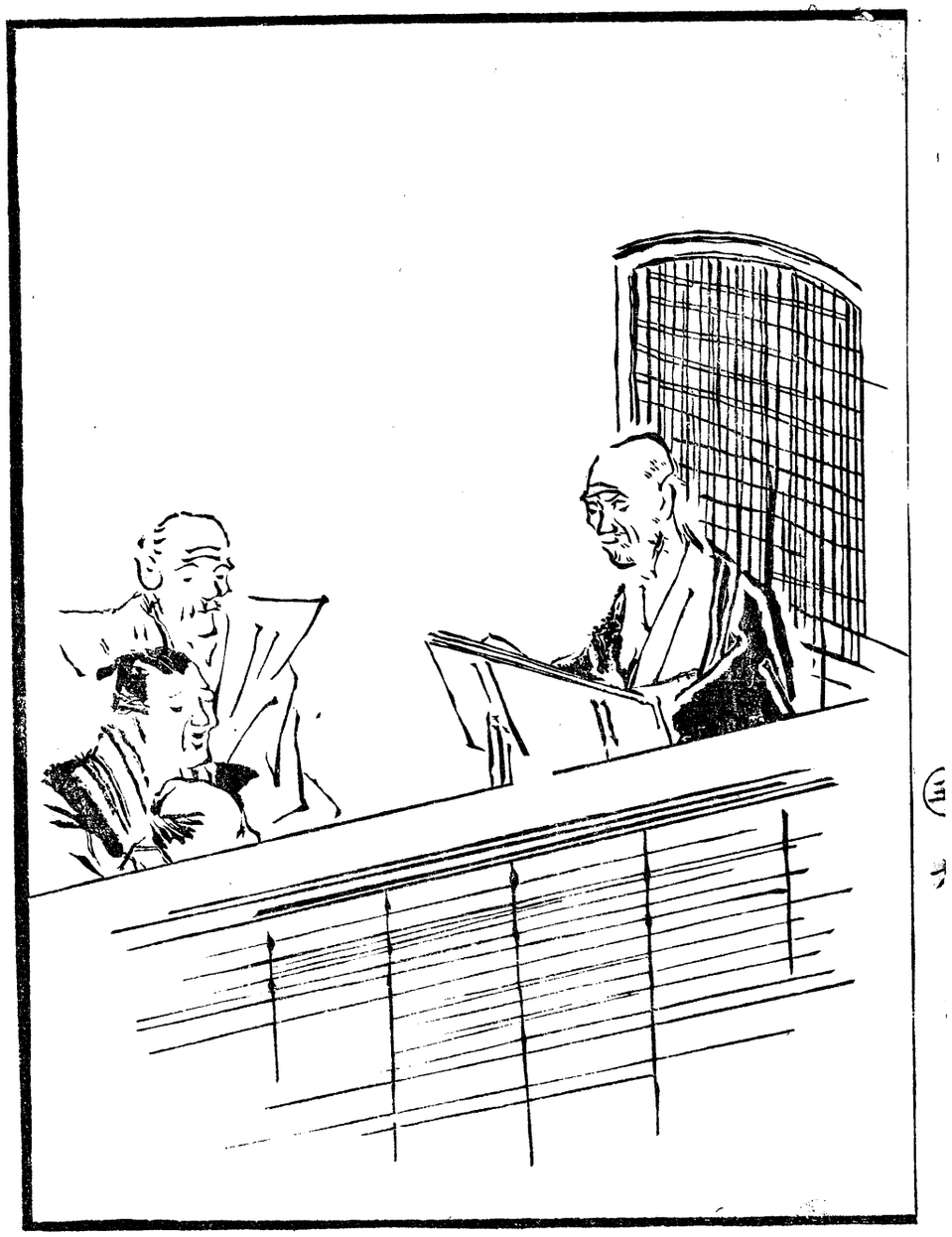
したりきある年の冬朝あごきよ門のあうう掃き清めあう
ましーよ禅僧の集ひ彩りをつくつと僧ハつどまよ彩りまよう
と風されされバ今日あん西山の芽拈院まて東巌禅師の説法
あうを彩雪よまあうと又ふ又坤うう〜てその説法ハ在俗子
うとも聴雪をやうきうやといそれしよ僧俗を接まどとて
彩るもぬうれバやうくその席よ維きて彩雪せられしよ禅師
説法の事よ大唱一声を發し堂中を向ひつまバ彩雪乃寒
気よ坤ねし気色あうさやうあうものごるハちやく置位しく
南ひまてもせよう〜修禅ハ坤ごつれしんあんものハあう〜我
とうご住うを易ね求められよ魚ハ水よ住うてあうを去ずず
人ハ妙法の中よ住うあうう妙法を去ごとく足ごれよ

といそれしを為二の雪うれて手末の髭ひ一附ふ氷解しさて
も題目も名号もうごんの外あうごの命牙金色ハ弥陀あうと
發明あうくいとまうこごれしハ四十一歳ハ十一月のとうごこれ
より鳥ハうあう〜雀ハちうう〜と鳴声を雪てもあうよハあうの妙
法あう人よもあう人ハ妙法あう〜一天四海皆悉妙法あうと舎
ひあうしうば坤よ石学乃語を説うあう常よ鳥ハあう〜雀
ハちうう〜というとをもて人を喻〜あつれたうこの坤末ものの
霊元禅師よ謁したうよ禅師の乃二を称〜く在俗ましう
う修乃の人もあうりうあうとう賞誉せられしとあん明年よ石面
梅巌の教を信しう手高嬉菴の門よ入りて性理乃蘊奥
をきはめ三年一致ハ旨を悟きめ五十五歳ふう〜剃

髮〳〵名を乃二とあらため堵菴乃命をうけて江戸ニまゐり
鹽町なる炭屋基〻ゝ南家ニ寓居して毎夜心学居士
を講説せられしニ彩霞日ニ増〳〵多くなれバ小川町なる
を藤家の邸中を借りあぢ〳〵僑居して講席をおうけなる
寛政三年ニ外祖田村生町小参前舍を建て舍名を宮崎
講談せられしニ聽衆ハ盛ニ多く門人社中を多くを授絶す
行はれしを乃二浪華ニ門茅楯松自謙舍主となりて
乃二の芳名都ニまねく出藍のわまをあり〳〵つねニ
乃誉と名づけ三教の淵源をやらげ説き提言緩語をもて
縱横自在ニ演説なるゆゑ如〳〵とゝもその要ハ致知格物ニ
至誠意正心ハ修りをもとし人〻固有の性を見ゐ徹せしめ

その性ニ率ひ孝悌を彩ふの外なし乃二乃系
橋まもなくして世未〳〵あるひハ諸國ニ遊説すること年
あり乃ちこゝ人ニ仰ぎてその教へを受けるといふこ
と乃〳〵実ニ奇才卓越の人なり享和三年六月十一日
病て江戸参前舍ニ没す享年七十九歳本庄摂江
妙壽寺ニ葬る法号を貞徳院法玄道二信士といふ
乃ちニ於て雄俊成功といふべし

美成ニ乃二常ニ教諭すること乃ち話説を紀
〻乃二道話と題〳〵已ニ梓彩す嗣刻すること
六編ニ乃ち大ニ彩る世ニ於て少補か
きなるべし

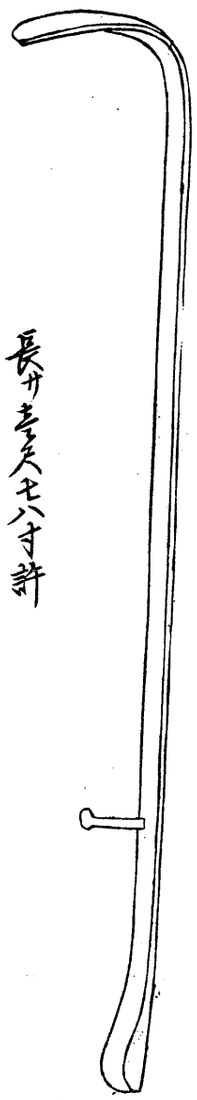


植松自謙

植松自謙名徳業ゝ信濃國の農家ゝ生れ壮ゝして江戸ゝ来り赤坂田町ゝ住して出雲屋和助と称し貸本を業とし〳〵世ゝ〳〵うとすん学ぶ志〳〵小川町の中屋敷三の講席ゝ歩を進めたび風雨ゝもろて怠ることなく〳〵浮終ゝ夜三の間ゝ学修りの人あり夜二の講席ゝて生来質朴ゝて篤実温厚の人なりしが茶たばこ酒世話ゝ行ることを我のこせ〳〵れ〳〵ゝ為ることその労をいとふことなく〳〵れば同社の若その志に感ずるを感じて出雲屋が為ゝ和助が為ゝを異名せ〳〵れ〳〵ゝやその為ゝ赤坂ゝ大災あり〳〵ゝ出雲

屋敷伊ぶ家のをきあくより火起りるるやどまとても通る
ぐくもあくざう生じバ家財を持さこびり一過ちく子を損
ともあんまハのち悔ともせんすべ市〜とてうぶ家の焼〜をた
ろう隅〜うて又ゐうさて遺う多く焼け失せく浮ハ黒乃
おきこそ人のぐうあれとて再び家をりこで麹町の秩父屋
集と〜〜ものの方ま裏〜てあ〜〜づその家れ雑き男
子とあぐびたもれつ〜さろう素読のんぐ人市どせれ
生ども何ぞ〜ゐ風情ま〜絵書の話をを読き学ゐら
ろ〜ともあ〜〜とのうくくろの絵をつ〜功まわこ〜ずい
さ〜ろも人ぶを修りするとあど市ろ人ゐ〜〜とぐ者ま秩
まて造れる萬療遂と〜〜ふ等引の具を腰ま〜て何〜〜を

紛れ少〜の隙ま肩をひと導引せれろう老体ま故郷
の信濃ま赴れ市ぐ〜そこま病留の中ふちぐ〜〜〜〜
が遂ま病て没すその池ま美れう
美成ニ萬療遂とふ等引の具ハひと美濃国子
る農家まて庫れ編をりてろうあま肩のころる
を揉ミ生ま〜いと快く按摩すま異ぐあ〜〜
クバやぐ〜蹣ま本づき責函をそへて造り出ろう
と柱杖自謙つねまおぐ〜れうその形左の如〜



長サ壹尺七八寸許

抑つゝこの萬療遂といふる名はいつゝまぞやと抑ふるに
萬病遂とこそいはめ但し萬の療治を遂るとの意
よやさは名義の雪えず抑それかう

僧獨立

僧獨立号明ようあり〳〵時は曼公と称し抗州仁和縣乃
人なりその先晋は戴安乃より出て世〳〵山陰の會稽ふ
住めり祖父よりうてたゞ名を家居を他邦ふ徙せり
父ろ〳〵業あり母は陳氏獨立弟磨石申年二月十日
ふ生る幼名を觀胤といふその大士と同辰なりよりて
天資穀悟し〳〵書を讀めるふ目をるれば抗誦せり幼
学子業ふ拳れ発〳〵豊序ふ登れり年二十五歳にて

會城の突ふ罹りまさ魏堅の翰を乱すふあうして意
ふ文筆を棄てゝ西湖ふ杖遊し〳〵山水の趣を領する
を欲ゞ三十歳の比なれいまゞ詩を為すとあふざる〳〵
よあるは社友獨立ふ遍うく詩を賦せむよ即声ふ應
じく云我来生渓頭渓月尚我宿たゞ此二句をもて衆
こゝふ異すこれより浮歌を捨て巷を下すふ沛然と〳〵
て藻思傑出し清彩自然ろ〳〵糟粕を洗ひ去り人語を
驚かすとあり〳〵と〳〵年五十ばかりおよびて清の代
とありて一天寰壁を蒙りこゝ惨憤ふ堪えず時ふ奥人
正年といふものあり同じく海ふ浮ぶ快く煙嶂と潺ぐんと
〳〵癸巳祈を叢〳〵その三月長崎ふ至れり時ふ承應二年